豊中―サンマテオ
都市提携ニュース

第 11 号
昭和54年 3 月31日発行
豊中・サンマテオ
姉 妹 都 市 協 会
事務局　豊中市市長公室
秘書課848-1121

ウィリアム・ケニーさんから 松の置物を
プレゼントされる下村豊中市長

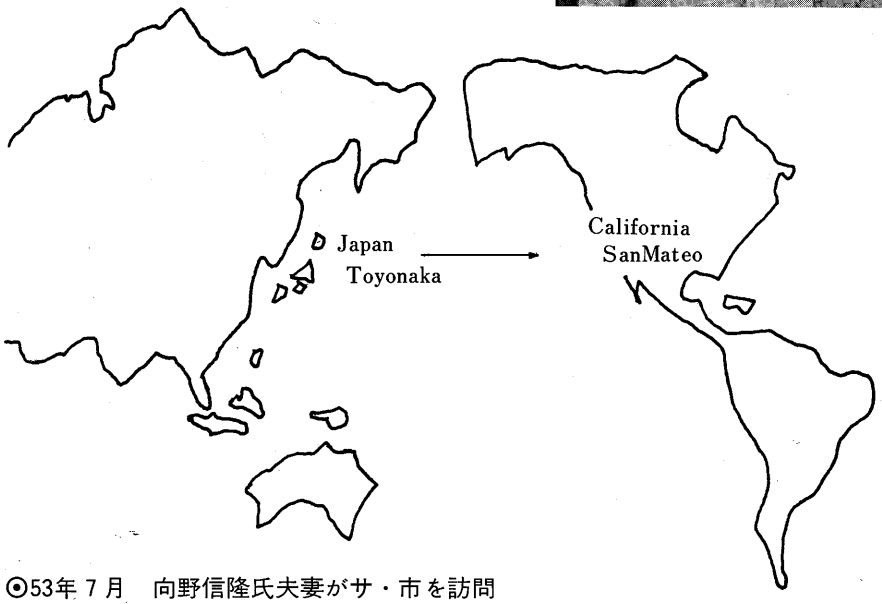
広がる
市民交流

ことばや国境の垣根をこえての相互訪問は、ますます親善の輪を深めています

豊中→サンマテオ

⊙53年６月　古沢信男氏夫妻サ・市訪問

⊙53年７月　伊藤益江、増本純子さん豊中三ロータリークラブの交換学生として１か月間サ・市訪問



⊙53年７月　向野信隆氏夫妻がサ・市を訪問

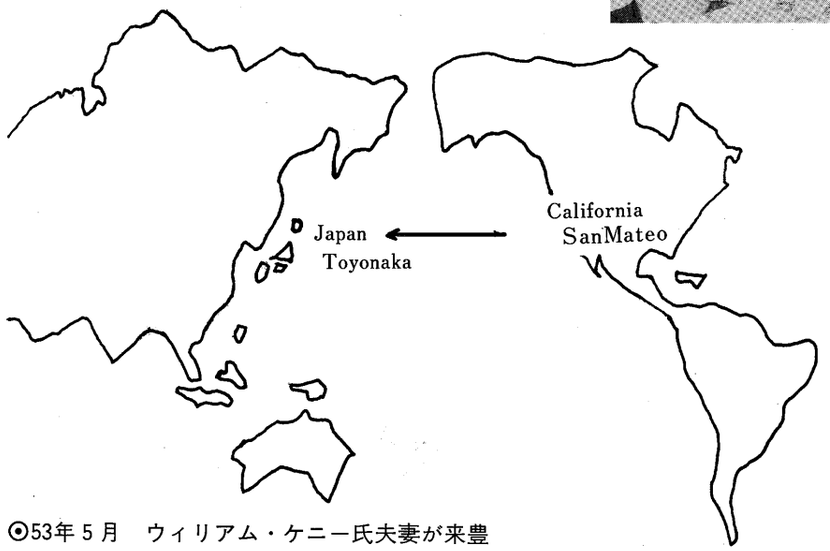
コンドン市長のあたたかい出迎えを受け「一日市長」を勤めました。

⊙53年10月　古沢啓子さんが英語の勉強のため半年間サ・市へ滞在

滞在中はウィリアム・ケニー氏宅でホームスティをしました。

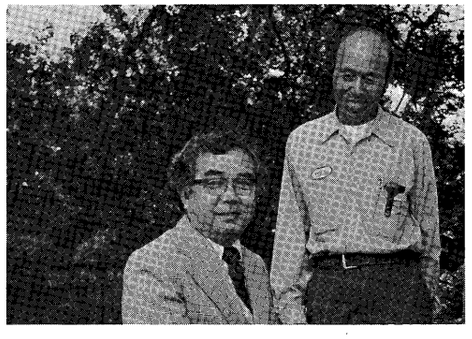
サンマテオ→豊中

⊙53年３月　２人のおばちゃん来豊
　このお２人は、アミー・ケラーさんと、ミナ・ペリソアさんでサ・市の小学校の先生で退職を期に豊中へ来られました。



⊙53年５月　ウィリアム・ケニー氏夫妻が来豊
　サ・市のロータリークラブ会長として東京での世界ロータリークラブ大会に出席のため来日、そして豊中の三ロータリークラブとの「姉妹クラブ」調印のため、豊中を訪問。訪問にあたって松の彫金を豊中市へプレゼントをし、「今後ますます両市の友好が深まるよう努力しましょう」とあいさつ。

⊙53年10月・54年３月　J・中田氏来豊
（サ・市姉妹都市協会日本委員長）



その他交流

⊙53年[redacted]・11月　韓国・全州市のワイズメンズクラブのメンバーが豊中市を表敬訪問

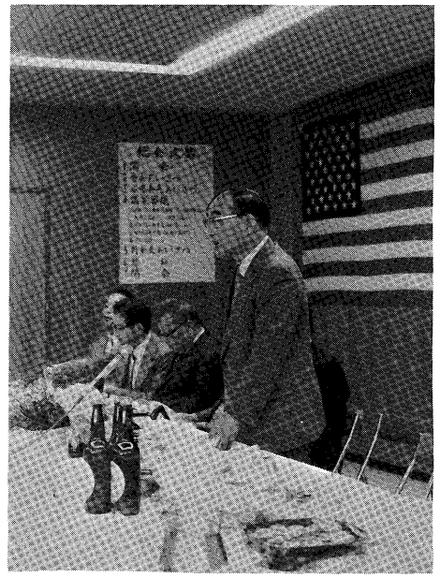
⊙53年７月～８月　ラボ国際交流活動として豊中在住の14名の学生がアメリカ各地へ交流活動のため渡米
　帰国後、豊中市を表敬訪問をし豊中市長を囲んで思い出話しに花をさかせた。

⊙53年７月～８月　筧加代さんがカナダのエドモントへ豊中の三ライオンズクラブの交換学生として訪問

その他行事

⊙53年４月
　昭和52年度の会計監査
　（豊中市役所・第一応接室にて）

⊙53年６月
　総会（豊中市民会館にて）



⊙54年１月
　第７回高校英語弁論大会
　（豊中市民会館にて）

⊙54年１月
　役員会（ホテル・アイボリーにて）

1978年10月ジョン・F・コンドン、サンマテオ市長が死去されました。ここに同市長が生前、両市の姉妹都市関係発展のためにささげられましたご功績をたたえますと共に、心から同氏のご冥福をお祈り申しあげます。尚、下村市長、広石会長からは早速ご遺族あて弔慰電報を打ちました。

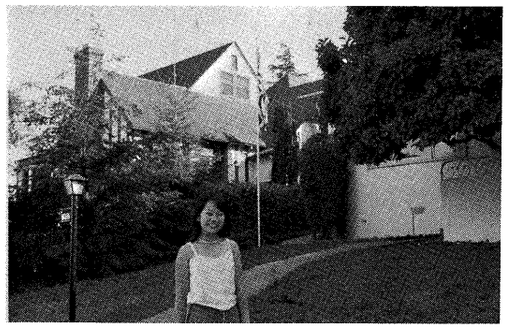
サンマテオでの１ヶ月

豊中市刀根山４丁目７－49
増　本　純　子

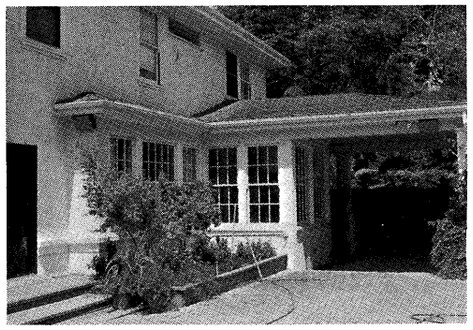
ロータリークラブの交換学生として、約一ヵ月間、サンマテオで予想もしなかったような素晴しいアメリカ生活を体験することができました。サンマテオはサンフランシスコから車で約30分くらいのところにある大きな町です。

気候も、霧で有名なサンフランシスコなどよりもはるかに良く、湿気が少なくて、温度が上がっても、余り汗をかくことがないので、スポーツをするにしても、何をするにしても、最高の気候だと思います。聞くところによると、アメリカ全土の人々がこのカリフォルニアに住みたがっているため、土地の値段が上がる一方だそうです。それにしても、家々が大きく、広々としているのは日本とくらべようもありません。サンマテオでは、約５週間、６軒のアメリカ人家庭で、それぞれ５日か６日間ずつ生活してきました。毎日の生活が、まるで映画やＴＶドラマで、見たのと同じなので、登場人物の一人になったような気分の一ヵ月間でした。

街並みは、どこへ行っても、道巾が広く、ゴミや土ぼこりが全くといっていいほどなく、高いブロック壁でかこまれた家は余りなく、外から見ると、どこの家も本当に手入れが良くゆきとどいていて、ペンキのはげかけた家や、芝生の枯れた庭などはお目にかかりませんでした。家の中も毎日、くつで歩き回るのに、真白のじゅうたんは全々汚れていません。そうといっても、奥さんたちが毎日、掃除機をかけているという姿も見たことがありませんでした。

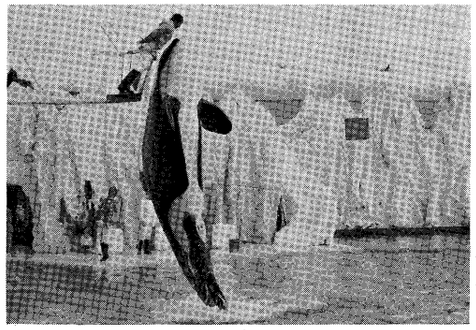


〔ホームスティしたノートン警察署長宅〕

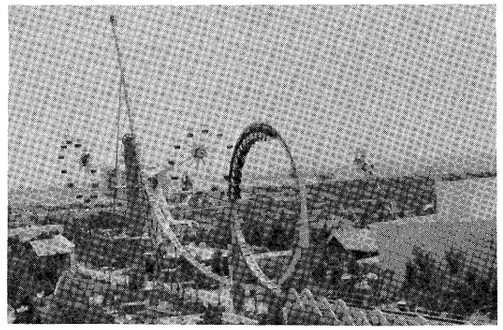


〔ホームスティしたケニー宅〕

毎日の生活はロータリアンの方々がサンマテオ近郊のいろいろな所へ連れて行って下さったので、忙がしいけれども楽しくすごせました。グレートアメリカやマリンワールドなどのアミューズメントパークは日本に比べるすべもないほど、壮大で大人も子供と一緒になって、ローラーコースターなどの乗り物に乗って遊んでいるようでした。

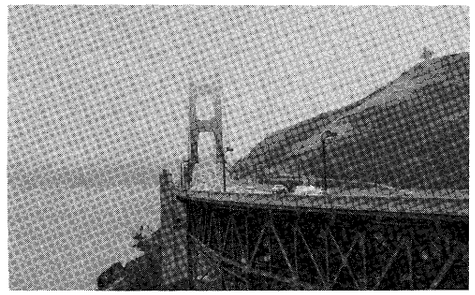


〔マリンワールドの遊園地〕



〔グレートアメリカの遊園地〕

サンフランシスコの市内は本当に、坂の中に町があるくらい、坂道の多いところです。そして、霧につつまれたゴールデンゲートブリッジやケーブルカー、対岸のバークレー、ソーサリートなど何もかもが美くしく、今でもまぶたに浮かんできます。その他にも、ドライブ・イン・シアターなど日本では見られないものもあります。駐車場のような所で夜の８時過ぎ、野外で車の中から映画を見るというものです。大きなポップコーンの袋をかかえて、車の中に引きこんだスピーカーの音を聞きながら映画を見るのも、アメリカならではのものではないでしょうか。また、野外コンサートも盛んに行われています。そこでは、芝生の上で毛布にくるまりながら、星空の下で、明々と照らされたステージのジャズバンドの演奏に耳を片向けたものでした。野球やテニスの試合ではホットドッグとコーラをパクつきながら、選手がミスをすると“Boo Boo”とヤジをとばしたり、海岸でのパーティーでは砂浜で、バレーボールやゲームをしたりして、大人同志がまるで子供のように大さわぎをして楽しみます。そのような、いろいろな出来事を通して、アメリカ人のものの考え方、受けとり方、生活態度なども、いろいろと考えさせられました。



〔霧のゴールデンゲートブリッジ〕

〔サンフランシスコのランバートｓ.ｔ〕

でも何にも増してうれしかったのは、たくさんの人々と出会い、どの方からも親切にしていただいて、ステキなアメリカ生活をエンジョイできたことです。一生の良い思い出として心の中にいつまでも残ってゆくにちがいないでしょう。

第７回　高校英語弁論大会開催される

恒例の高校英語弁論大会は、今年で第７回目を数え、去る１月20日㈯午後２時から、昨年と同様豊中市民会館で開催されました。

後援は豊中市、豊中市教育委員会、豊中北ＹＭＣＡ、大阪アメリカンセンター。会場には、各学校からクラスメイト、先生、会員等の熱心な聴衆が多数こられ、広石会長、島岡助役の激励あいさつのあと、18名の各選手によってコンテストが開かれました。審査には、ナンシー坂本先生（大阪南ＹＭＣＡ）マーク・ドルシー先生（大阪南ＹＭＣＡ）川合隆子先生（大阪北ＹＭＣＡ）宮城善弘先生（豊中高校教諭）久志助良先生（豊中教育研究所）が当られました。

（出場者は次のとおりです。）

番号	学　校　名	人数
1	東豊中高校	2
2	豊中高校	3
3	豊島高校	2
4	梅花学園高校	1
5	被昇天学園高校	5
6	宝塚高校	3
7	小林聖心女子学院	1
8	ガールスカウト豊中クラブ	1
合　計		18名

（入賞者は次のとおりです。）

順　位	氏　名	学校名	演　題
優　勝	小村　江里子	豊中高校	協力の尊さ
準優勝	高田　由貴代	宝塚高校	男性と女性
第３位	戸知谷　充子	被昇天高校	私にとって英語とは
第４位	水野　直美	ガールスカウト豊中クラブ	冷静な判断と勇気を持とう
第５位	山脇　恵子	東豊中高校	理想的な修学旅行

配点はイントネーション・プロナウンシエーション50点、コンテンツ・コンポジション30点、ベアリング・デリバリー20点、となりました。

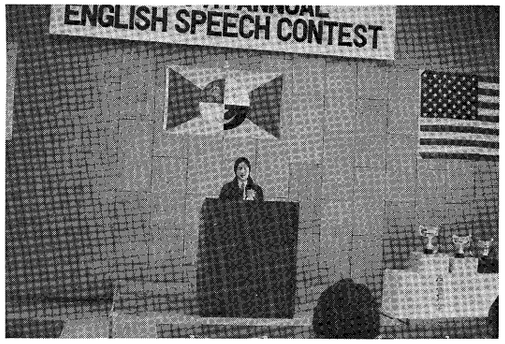
入賞者には、協会会長賞と豊中市長賞が贈られ、参加者全員には、参加賞として、図書券と弁論の際の写真及び録音テープを贈りました。

大会に際し何かと御支援、御協力を賜りました、関係各位に心から感謝申しあげます。

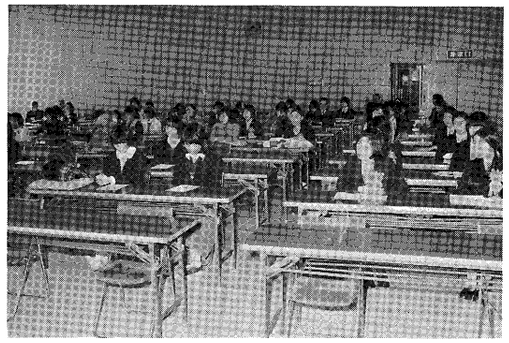
（協会事務局　記）

Ⓐ

Ⓑ



Ⓒ



Ⓐ会長あいさつをする広石幸八郎氏

Ⓑ熱弁を奮う選手

Ⓒ熱心に聞き入る聴衆者

Ⓓ豊中市長賞を受ける優勝者、小村江里子さん

Ⓔ入賞者を囲んでの記念撮影

Ⓓ

Ⓔ

審査員の立場から

豊中市教育研究所
久　志　助　良

恒例の高校英語弁論大会も、今年は第７回目を数え、新春の行事として一段と定着するとともに、内容的にも立派なものに成長してきましたことを、とても嬉しく思います。

この大会の審査をさせていただくのは、今回が２回目です。前回ははじめてでしたので、見知らぬ大会に臨む不安感が先に立ちましたが、今回は非常に待遠しく思われました。若い高校生の考えを英語で聞くことができるのは、大変な魅力です。日本語の場合よりも、より明確に各自の考えが表現されるからです。

今回は、18名の高校生が、日頃考えていることを発表してくださいました。内容は、いずれも自分の生活に立脚した立派なものでした。まだ若くて、人生経験の少ない高校生が、教訓的なことをさも悟ったように聴衆に語りかける、といったタイプのスピーチはどうも……といわれる方もありますが、訴えるものさえあれば、それはそれでいいのではないでしょうか。いずれにしましても、とても楽しく、興味深く聞かせていただきました。

当日の講評の折に、審査員を代表してナンシー・坂本先生が話されましたように、内容はおもしろく、満足すべきものであったと思います。いかに英語がじょうずになっても、話す内容が貧弱なものでは仕方がありません。この意味で、内容が満足すべきものであったということは、大いに喜ぶべきことだと思います。

内容の次には、英語そのものが問題になりますが、この点も、各校を代表する方々だけあって甲乙つけがたく、いずれも高校生の英語としては大変立派なものでした。しかし、欲をいえば、改善していただきたい点があります。今後のために、そのいくつかをナンシー・坂本先生の講評から紹介させていただきますと……

１）ゆっくり話すこと

○スピーチは、会話の場とは状況が異なる特別な場であるので、もっとゆっくり話す方が良い。

○間（ま）の置き方は良いが、間と間のあいだの部分が速口になる傾向がある。

○強めたい所では叫ぶような調子になりがちだが、スピーチでは、ゆっくりと話せばその部分が強調される。

２）正確に発音すること

○舌を奥へひいて発音する傾向がある。日本語とは逆に、舌を（くちびるも同様だが）前の方に出すようにして発音するとよいと思う。

例えば、one-man car というときの［n］の音は、「あんぱん」の「ん」とは異なる。舌を前の方へ出して、上の歯茎の裏につけること。

［ð］の発音でも、同じことがいえる。例えば、but theseというときの［ð］の音は、その前の［t］の音の影響を受けて、舌が上の歯茎の辺りにある状態で発音されてしまうが、もっと舌と舌を前へ出して、上の前歯の下へ舌をあてること。

○シラブル（音節）がぬけることが多い。例えば、city（市）［síti］は［sti］のように聞こえる。これでは聞きとりにくい。

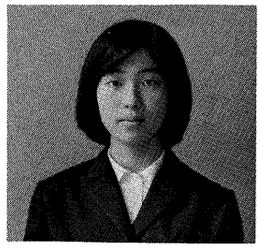
○［li:v］と［liv］、［siŋ］と［θiŋ］などは日本人の耳には同じように聞こえるが、英語では、leave「立去る」、live「住む」、sing「歌う」、thing「物、事」と全く別のことばなので、区別して発音しないと誤解が生じる。

大体、以上のようにまとめることができると思います。

私達日本人は、英語はペラペラしゃべるのがいいように思いがちですが、決してそうではありません。ひとつひとつの音を正しく発音し、ゆっくり話すことが大切です。特に、大勢の人に話しかけるときには、この心がけが大切です。こうすることによって、自分の考えを正確に聞き手に伝えることができるのです。今後の出場者には、まずこのことをしっかり心に留めておいていただきたいと思います。

次回の大会が、一層立派な大会になりますよう、心から祈っております。

弁論大会に参加して



優勝者
豊中高校２年
小　村　江里子

私がこの弁論大会の用意をし始めたのは、たいへんおそく、原稿提出も実は大会の前々日でした。先生から「一度は経験してごらんなさい。」と勧められて、友達といっしょに、あっさり出場を決心してしまった私は、準備段階のことを、軽く考えすぎていたように思います。

原稿作りは、思ったより大へんでした。私は、文化祭の英語劇の練習を通じて感じた、協力の大切さをテーマに決め、まず、思いつくまま、日本語と英語のごちゃごちゃに混ざった文を作りました。そして、その文をもとに、単語を辞書で引き、文章表現を変え、先生にも見ていただいたりして、どんどん改めていきました。しかし、出来上がりは、私が原稿を眺めつつ「かなり良くなったなあ。」と思ったにもかかわらず、先生方からは、「君たちの英語ならこんなもんかな。」という煮えきらぬ評があったような次第なのですが。

さて、次は暗誦です。ふだん、何気なく発音していた簡単な単語でも、いざ大きい声で、はっきりと、聞きとれるように発音しようとすると、あやしくなってきます。だから、あらためて辞書で、中学校で習ったような単語の発音記号を確かめたことも、しばしばでした。中には、当日会場に着いてから、調べたものもあります。

こんなわけで、私のどたん場での準備が不完全ながら、なんとか終わり、ついに迎えた当日です。私は「ただ、ど忘れなどして恥をかかなければ、それで…。」と、これだけが心配で、賞のことなど夢にも思っていませんでした。

本番ではたいへんあがりました。頬はひきつってピクピク震え、手足はガクガクしました。弁論を終えて、舞台を下がると、急に心臓が高鳴り、どっと力がぬけ、壁にもたれてしばらく休まずにはいられませんでした。とにかく、こんなに大ぜいの前で英語を話したのは初めて、そして、こんなにあがったのも初めてです。

休み時間はとても楽しいものになりました。席の近い他校の人と、さまざまなことを語らいました。自分の校内のことしか全く知らない私には、他校の様子などについて、とても興味深く聞くことができました。

私は、大会の準備を通じて、自分の英語の、わりといいかげんでたよりないことを、実感しました。この準備によって私は、新しい単語をいくつか覚えたことにより、自分の知っている範囲で、せいいっぱい表現することによって、自分の現在もっている英語力が、欠けている所は補われ、がっしりと固められたような所に、プラス面があったと思います。

また、大会当日の出来事は、どれも楽しい良い思い出となり、私はサンマテオの鐘を見るたびにあの仲間たちの笑顔を思い出し、英語を学んでいく上でのひとつの励みを与えられるのです。

編　集　後　記

53年度は世界的な経済不況の為(ため)か、豊中市を訪れる、サンマテオ市民もサンマテオを訪れる、豊中市民も少なく充分な交流ができなかったことを残念に思います。

今後も種々の行事を企画し都市提携の炎を絶やさないようにがんばりたいと考えますのでよろしくお願いいたします。